

News Letter

Graduate School of Education

巻頭言 稲垣 恭子 研究科長 ②

研究ノート ③

教員から 佐野 真由子 教育社会学講座 教授
院生から 比護 遥 修士課程2年
社会人院生から 佐々木 大樹 博士後期課程3年
留学生から 祁 白麗 修士課程2年生

活動報告 ⑤

臨床教育実践研究センターから
山崎 基嗣 附属臨床教育実践研究センター 特定助教
教育実践コラボレーション・センターから
楠見 孝 教育認知心理学講座 教授

教育学部創立70周年記念事業について ⑥

トピックス ⑧

「日本型」教育文化・知の継承支援モデルの構築と展開プロジェクト
岡野 憲一郎 連携教育学講座 教授 臨床教育実践研究センター長

事務室から 宇野 純子 掛長 ⑧

若手研究者出版助成事業 ⑨

諸記録 ⑪

1. 主な出来事(H30.11.1～H31.3.31)
2. 入試結果(H31年度)
3. 学位授与件数(H30年度)
4. 教育職員免許状取得状況(H30年度)
5. 外部資金受入れ(H31年度)
6. 科学研究費補助金(H31年度)
7. 教員寄贈図書リスト(H30.4.1～H31.3.31)
8. 人事異動(H30.11.1～R1.5.1)
9. 基金納付者リスト

諸報 ⑫

新任教員・事務職員紹介
名誉教授訃報



京都大学 大学院教育学研究科ロゴマーク

このロゴマークは、京都大学学術情報メディアセンターの客員教授・奥村昭夫先生のデザインです。奥村先生は、ロート製菓、グリコ、牛乳石鹸などのロゴマークやパッケージなどを手がけた著名グラフィックデザイナーです。本研究科・学部の「育ち」「つながり」「先端」といったキーコンセプトをもとに、教育学部本館の正面玄関を見守るクスノキの葉をモチーフとし、緑のグラデーションで成長の変化、中央の空間でこれから生まれてくるものを表わし、全体として両手で優しく包み込むイメージのデザインとなっています。

創立70周年を迎えて



教育学研究科長・学部長 稲垣 恭子

教育学研究科・教育学部は今年、創立70周年を迎えました。

これを記念して、6月30日に行われた記念行事(記念式典、講演会、祝賀会)を中心として、70周年記念誌の刊行、時計台記念館歴史展示室における記念展示など、研究科・学部の節目となる一連の行事を行いました。大学改革の波によって高等教育全体が揺れ動く中で、研究科・学部の蓄積を改めて見直すと同時に、新たな方向を展望する良い機会となりました。

70年のあゆみを記した記念誌『資料に見る京都大学教育学部の70年』は、40年史、60年史とは少し異なる角度から、文書や写真、手書きの資料やチラシ類などの豊富な資料を収集・整理し、それらを通して研究科・学部の歴史を振り返り、また近年の動向とこれからの展望を示しています。資料と解説を合わせて読み応えのある面白いものになっています。

また、6月4日から7月16日までのほぼ1ヶ月間、「京都大学教育学部の70年とこれからの挑戦—受験文化・学生文化・学問文化の70年—」と題した記念展示を、時計台記念館歴史展示室で行いました。『螢雪時代』等の受験雑誌や「合格体験記」等を集めた受験文化、卒業論文や修士、博士論文のテーマの変遷、京都学派と教育学部の学問文化の関係など、本研究科・学部ならではのユニークな展示で、各方面から問い合わせや取材もいただいています。

6月30日の記念行事には、総長、元総長、名誉教授をはじめとして記念式典に約180名、講演会には一般聴講者も含めて約270名、祝賀会には約180名と、多くのご参加を得て、暖かく和やかな雰囲気の中楽しい一日となりました。記念事業委員会の先生方をはじめ、事務職員、同窓会役員の方々には、時間を惜しまず細かいところまで配慮の行き届い

た準備をしていただきました。心からお礼申し上げます。

「私説・京都大学論—「非」体制というダンディズム」と題した竹内洋名誉教授の記念講演では、京都大学の内側と外側の両方の視点を織り込んだスリリングな京都大学論を聴くことができました。「京大らしさ」や「自由の学風」は、一般のイメージのように制約のない自由な空間の中ですくすくと育ってきたわけではなく、東大との非対称な差異や、地理的、財政的なさまざまな制約の中で、それらを跳ね返すダンディズム(やせがまん!)としてつくられてきたという指摘は、大学改革で揺れ動く状況の中で「京大らしさ」を保持していく上で大いに励まされるだけでなく、教育学研究科・教育学部のこれからのことも示唆的です。

総合大学における教育学部が、教員養成大学とは違う意味でも、近年難しい状況にあることはいうまでもありません。しかし一方では、人工知能等を含む技術革新の中で、人間とは何か、文化とは何かが改めて問われる中で、人間と教育についての根本的な問い直しが求められると同時に、それに基づく制度設計や新しい教育方法の開発などの具体策が喫緊の課題になっています。このような大きな変化に対応していく上で、柔軟な思考と幅広い知的好奇心を育ててきた京都大学の「自由の学風」は大きな力になります。創立70周年を機に、こうした伝統の創造力を生かしつつ、次世代の教育と知の継承に寄与しうる革新的な研究・教育拠点を目指していきたいと思っております。

最後に、70周年の記念事業に際して、多くの方々から多額のご寄付をいただきました。皆さまのご厚意に応えられるよう、本研究科・学部の院生・学生、留学生への支援など、次世代の教育を担う教育専門家の養成に役立てていきたいと思っております。この場を借りまして厚くお礼申し上げます。

教員から

教育社会学講座
教授

佐野 真由子



史料を使い、史料を守る

ロンドン郊外にある英国立公文書館は、学生時代から通い詰めた場所だ。今年の3月にもお世話になった。ある日、閲覧していたのは、1951年に英国全土で展開された巨大文化事業、Festival of Britainの計画をめぐる政治的経緯を収めたファイルである。ところが、その内側にもう一つ、薄い紙ファイルが挟まっていた。添付文書かと思ったが、内容が本体とどう関係するのか、ピンとこない。不審に思って眺め直しているうちに、それは別の請求番号が付された別の史料で、何かの拍子にそこへ入り込んでしまったらしいと気づいた。

いつからそうになっていたのかわからないが、もしその間に、挟まってしまったほうの史料を閲覧しようとした人がいれば、探し出せなくて困ただろう。こんなことは珍しいケースではあるが、私の知る限り、英国内の主要な文書館では、利用中に史料や目録の異常を発見したらぜひ指摘してくださいと、館内に表示があるのが普通だ。そこで、たまたま近くのカウンターにいた係にファイ

ルを見せ、事情を説明すると、どうだろう。彼は見る間に丸顔を感動で紅潮させ、“Oh! Fantastic!”と叫んだのである。そしてファイルを受け取り、「まったく別の史料がここに……」とつぶやきながら確認したのち、私に向き直って、知らせてくれて本当にありがとうと、心からの感謝を述べられた。

普通の一職員と思しき彼から自然に示されたこの反応を、私は忘れることができない。皆で史料を守る——先人の歩んだ記録を正しく整理し、使用可能な状態に保つ——ことの大切さが、かくも徹底して共有されている。その底にある、歴史への敬意と呼ぶべき感覚に、いまさらながら圧倒されたと言ってもよい。そして、研究者として史料を使わせてもらうことで、自分もそれを「守る」営みに加わっているのだという意識を新たにした。

同時に頭のどこかで、うーむ、こういうときにも“Fantastic!”という表現を使うのか、一つ学んだなあと、あらぬことを考えていたのも事実なのだけれど……。

院生から

修士課程2年
比護 遥



「教育」からのメディア研究？

メディア研究を志して佐藤卓己先生に師事することを決めるとき、教育学研究科の大学院生になるということに大いに困惑した記憶があります。学部の専攻も元々の研究関心も教育学とは大きく異なる私にとって、まさに未知の領域だったからです。社会学や政治学などの学科ではなく、なぜ教育学からのメディア研究なのか？この1年間、自己紹介に苦労するたびに否応なくこの問題を考えることになりました。

そんな私にとって幸運だったのは、組織再編により「教育学環専攻」の1専攻になった最初の年に入学したことでした。修士1回生全体の必修科目として新設された「教育科学基盤演習」と「学際総合教育科学」では、様々な講座の先生方の講義を受け、他分野の院生と議論することができました。狭い専門分野を超えてコミュニケーションを行うとき、自らの立場を簡潔かつわかりやすくまとめるとともに、全体を俯瞰する能力が求められます。予期しなかった見方に驚かされたことも少

なくありません。昨年末に参加した北京師範大学教育学部との学術交流活動と合わせ、専門から離れて「教育」を広く見渡す体験が、結果として自らの研究に柔軟性を与えてくれました。

メディア文化論研究室が教育学研究科に設置されるようになった来歴については私がここに正確に書くほどの知識を持ち合わせておりませんが、1年間の模索を経て少なくとも私個人の研究には「教育」の視点が少なからず生かされるようになったと考えています。修士論文のテーマとして考えているのは、近代中国における「読書」の営みが宣伝を軸とする政治文化にどう接合していったかという問題です。これまで行ってきた『読書』や『読書生活』などの中国の雑誌の研究に、「読書」を教育実践における不可欠な部分として捉える視点を得たことでこのテーマにたどり着きました。

1年後には無事「教育学」の修士号を手に入れられるよう、研究に邁進する所存です。

社会人院生 から

「険しい道から生まれるもの」

私は児童相談所にフルタイムで勤めながら、愛知から京都に通い、児童福祉領域における心理臨床を研究しています。ただ、入学前のことを思い返せば、受験しようかどうか、迷っていました。入学を決めた後も、周りには「大変では?」「なんのために?」と怪訝な顔をされる方も少なくありませんでした。そして、通い始めた後も、半日休むのさえ容易ではなく、職場の方々には現在も迷惑をかけています。学校でも、先生方や同級生、先輩や後輩の方々にもご迷惑をかけ、多くのご配慮を頂いています。

それでも、3年目となった今、京都に来て本当に良かった、と感じています。実務家としての取り組みを洗い出すことができる。意思決定が連続する現場から一歩距離を置き、自分の実践を再考する機会を持てる。そのことを学校の方々があたたかく支えてくれています。そして、高橋教授や西准教授、講座の仲間と議論し、論文を書き進めていく時間は贅沢で、楽しいもので

す。傍から見ると、京都までわざわざ通うことは遠回りでも、無駄な時間に見えるかもしれませんが、実際は、実践を相対化する上でも、論文を書く上でも最適なのです。この2年間は、これまでで一番多く論文を書くことができた2年間となりました。その点でも、周りの方々には感謝しかありません。

もし、チャレンジを迷われている方がいたら、十分迷った上で、挑戦されることをお勧めします。途中で挫折するかもしれません。退学することになるかもしれません。確かに、楽しくても甘い道ではないですから。それでも、挫折は、失敗でも無駄でもありません。極端な言い方かもしれませんが、入学しなければ、退学もできません。なにより、難しい状況でチャレンジすることこそ、ドラマがあります。新たなドラマと出会いが生まれる瞬間を、仲間として楽しみにしています。

博士後期課程3年
佐々木 大樹

留学生から

人間として選んで生きる

最近、中国のSNSで、ある友人が進路について家族にアドバイスを受けているのを見た。そのアドバイスには、あなたを愛している、思っているからこそこういうことを言っているよという子を思う親の心があふれていたが、同時に、見た瞬間にゾッとしてしまうような言葉も含まれていた。それは、「人間の仕事は3つに分けられる。最上の仕事は、能力があり才能のある人が起業したり、会社の経営者になったりするもの。2流の仕事は、公務員や教員などの安定が保証されているもので、3流の仕事は、他の人のためにサービスするものだ。女の子には2流のものが一番いいんだよ」という言葉である。そう言っていたのは、学校の先生だった。

口にこそしないものの、昔の自分もこういう考え方に影響されている1人だった。「女の子」として就職に有利な財務管理という専門を選び、「いい大学」に入るために努力した。ところが、人生にも回帰線があるのだろうか。専門科目と苦戦しながらも、自分のやりたいことに惹

かれて日本語を勉強しはじめ、大学生グリーンキャンパスに参加したり、財務管理とは関係のない活動に取り組んだりした。そうした活動を通じて、さまざまな言葉や人、動植物、地域、文化と出会ったことで、世間に流された選択のままでいいのだろうかと思ひ、心が突き動かされた結果、環境教育の研究を志す今日の道を歩もうと決心がついたのだった。

これからの研究生生活に不安がないわけではないが、修士論文でてんてこ舞いになったり、(まだまだ下手だけれども)日本語で研究室のみんなと議論をしたりするのはやはり楽しいし、「今を生きているな」という感じがする。教育に関する仕事なんて安定と保障のある2流の仕事だと思う人もいるかもしれないが、私は、人間と正面から向き合い、子どもがやりたいことを尊重し、サポートする仕事だと思っている。

修士2回生
祁 白麗



附属臨床教育実践研究センターから

臨床教育実践研究センターの活動

附属臨床教育実践研究センター 特定助教 山崎 基嗣



当センターは、一般市民に開かれた臨床実践としての心理教育相談室での、大学院生や教員による日々の臨床活動をその主たる業務としています。また、学校現場に密着したテーマを現場に還元することを目指し、教師、臨床心理士、精神科医等が交流し思索を深める「リカレント教育講座」、一般市民への教育的啓発を目的とする外国人客員教授による「公開講座」、学校現場での実践を心理・教育的に検討する「現場実践ケースカンファレンス」、東日本大震災被災者に向けた「こころの支援室」の活動、センター関連の研究成果を収めた「京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要」の発刊など、教育・実

践・研究活動を進めています。

昨年度のリカレント教育講座(第22回)は2018年8月19日(日)に開催し、『心の教育』を考える—教師のメンタルヘルス—をテーマに、シンポジウムや個別事例の検討を行いました。今年度は、『心の教育』を考える—多職種・多機関の連携—をテーマとして8月18日(日)に開催を予定しています。また10月27日(日)には、カリアリ大学のステファノ・カルタ先生をお迎えし、「芸術と心理療法における愛・意味・美」と題した公開講座を開催いたします。

東日本大震災に関連して関西に避難、移住して来られている方々への支援を実践しているこころの支援室では、教員、学生が協働し、定期的な支援活動を行っています。2018年12月には「京大探索クリスマス編&和(わ)・話(わ)・輪(わ)の会」を院生スタッフ主導のもとに開催し、共通の背景を持つ参加者同士が新たに出会ったり、継続して来られている参加者同士が再会し、近況を伝え合ったりする機会とすることができました。震災から8年以上が経過し、それぞれの世帯の状況も個別化してきていますが、参加者のニーズに合わせ、今後もこのような支援活動を継続してまいります。



(写真は、昨年秋の公開講座のもので)

教育実践コラボレーション・センターから

高校における探究学習による批判的思考の育成

教育認知心理学講座 教授 楠見 孝



私が、2007年のセンター発足以来進めてきたのは、学校教育改善プロジェクトにおけるスーパーサイエンスハイスクール(SSH)の探究学習の効果測定である。以下の3つの高校の協力を得て、批判的思考力の育成に焦点を合わせてプロジェクトを進めてきた。

滋賀県立膳所高校においては、授業観察と調査、および特別授業を行った。2007年は「現代文」の授業を対象として、批判的読解指導と協調学習による批判的思考態度や読解力の向上を検討した。2008年は3年生全員を対象として、5月と12月に調査を行い、探究学習が批判的思考態度、科学およびメディアリテラシーを向上させることを明らかにした。2010年-2012年は、全校生徒対象の調査研究を行い、学年進行による批判的思考態度の上昇、批判的思考の特別授業によって批判的思考のイメージの変化を解明した。これらの結果は、教員にフィードバックし、中央教育審議会高等学校教育部会でも報告した。

2015年から2017年には、京都府立嵯峨野高校において、西岡教授とともに、生徒対象の探究学習に関する講演、評価手法に関する教員との検討会、調査、探究学習の成果発表会への出席を行った。調査については、1学年生徒全員を1年次から3年間毎年2回計6回の継続調査を行った。その結果、探究型学習活動を通して、批判的思考力と探究的学習スキルが向上することが明らかになった。

2017年からは、兵庫県立尼崎小田高校において、西岡教授とともに、当校の教員と協力して、2つのコースの1年から3年の生徒全員に対して年2回の継続調査を進めている。ここでは、生徒が探究学習で身につけた探究スキルや批判的思考態度が、教科学力に及ぼす影響を明らかにしている。

今後も本プロジェクトでは、探究学習が、生徒の能力をいかに向上させているかを解明し、教育改善に役立てたいと考えている。

教育学部創立70周年記念事業について

【記念式典・記念講演会・祝賀会の開催】

教育学部は、昭和24(1949)年5月に創設され、令和元(2019)年5月に創立70周年を迎えました。これを記念して、記念式典、記念講演会及び祝賀会を令和元(2019)年6月30日(日)に百周年時計台記念館において開催し、記念式典には、総長、元総長、名誉教授、部局長、教育学部にゆかりの関係者など、約180名が参加されました。

まず、稲垣恭子教育学研究科長が挨拶の中で、過去70年にわたる教育学部の歴史を支えた学内外の人びとへの感謝とともに、次世代の知と教育の継承に寄与しうる革新的な研究・教育拠点を目指していく旨を述べました。続いて山極壽一総長、伯井美德文部科学省高等教育局長(代読：吉成竜也国立大学法人支援課課長補佐)、南川高志文学研究科長、藤田裕之教育学部同窓会会長よりそれぞれ祝辞がありました。

続いて、記念講演会では、竹内洋名誉教授が『私説・京都大学論—「非」体制というダンディズム』と題して、時折ユーモアを交えながら、京大の学風や学生・研究者の理想像、大学改革が進む中での大学像について語り、一般市民を含む約270名の参加者を魅了しました。

祝賀会では、秋田喜代美東京大学教育学研究科長の祝辞に続き、上杉孝實名誉教授の発声で乾杯を行い、教育学部同窓生として商船三井名誉顧問芦田昭充氏及び作家綾辻行人氏からのご挨拶、本学部4回生の松田康介氏のオカリナ、久富望助教のバイオリン、京大出身のピアニスト横山智昭氏のピアノによる「故郷」演奏など、終始和やかな雰囲気の中、最後に森田正信理事の挨拶により、盛会のうちに終了しました。



記念式典



記念講演会



祝賀会



教育学部生等による演奏

【70周年記念誌の刊行】

令和元(2019)年5月に、70年史編集委員会より『資料に見る京都大学教育学部の70年』が刊行されました。本書は、資料にもとづきながら最近の動向を含む70年間を振り返るというコンセプトで、大きく次の3部によって構成されています。

第1部「教育学研究科・教育学部の新機軸」では、最近の10年間(平成21(2009)年～平成30(2018)年)に生じた大きな変化―研究科の組織再編やグローバル教育展開オフィスの新設、事務組織の再編といった組織上の変化、研究科と学部における入学者選抜及び教育課程の改革、教職責任部局としての取り組み―を取り上げて説明しています。

続く第2部「資料に見る70年」では、8つのテーマ―学部・大学院・講座、建物・敷地、学部教育、大学院教育、国際化、女性、学生生活、学生運動―を設定し、創設以来70年間の道のりをまとめました。編集委員が分担して、回想録や新聞記事、各種の統計データなど様々な資料に言及しながら執筆しています。資料を丁寧に見ていくと、多くの発見があると

思います。

そして、第3部では、教員一覧、教職員数や学生数、科学研究費補助金研究課題、卒業論文・修士論文・博士論文の題目など、基本データを取りまとめています。70年間の全体がとらえられるように努めました。

また、同書の作成にあたり、広く同窓会員の方に呼びかけて写真や資料をご提供いただきました。そうした貴重な写真や資料を盛り込むことで、同書の内容をいっそう豊かにすることができました。ご協力に感謝します。



【70周年記念展示の開催】

『京都大学教育学部の70年とこれからの挑戦』

期間：令和元(2019)年6月4日(火)から7月16日(火)まで

場所：京都大学百周年時計台記念館1階歴史展示室内企画展示室



記念展示では、70年間の教育学部・教育学研究科の歩みを、受験文化・学生文化・学問文化の3つの文化に焦点を当てて立体的に紹介しました。具体的には、株式会社世界思想社教学社の協力を得て参考書「赤本」のバックナンバー、及び教育学部図書室所蔵の受験雑誌「蛍雪時代」バックナンバーを置いたほか、当時学生だった本学部教員の論文の実物や、論文題目で多用された用語をまとめたパネルなどを展示しました。また、70年間にわたる過去からの発展の軌跡を反省的にとらえるだけでなく、現在の教育学部・教育学研究科が、今なお学部設立の理念を忘れず、グローバル化時代における人類の福祉に向けて、未来へ挑戦し続けている姿を示しました。

(展示テーマ)

- ・年表・写真で見る受験文化・学生文化・学問文化の70年の変遷
- ・受験生から見る京都大学教育学部―受験メディアの合格体験記が語るもの
- ・学生は何を卒業論文のテーマにしてきたのか―学生の関心と学問が変わるところ
- ・教育学部と京都学派の哲学者たち―アカデミックな文化継承と発展
- ・教育学部の未来への挑戦

トピックス

「日本型」教育文化・知の継承支援モデルの構築と展開プロジェクト 支援モデル1「世代間関係と発達を土台とした母親支援モデル」

連携教育学講座 教授 臨床教育実践研究センター長 岡野 憲一郎

支援モデル1グループは、楠見孝先生、明和政子先生、高橋靖恵先生、梅村高太郎先生と私岡野の5人からなる小所帯である。それぞれ異なる研究テーマや理論的なオリエンテーションを持った私たちが、「日本型」教育文化・知の継承支援モデルの中の「支援モデル1世代間関係と発達を土台とした母親支援モデル」を担当し、共同研究を行うこととなった。グループの正式な初顔合わせとなる会議が昨年の12月21日に行われたが、そこではそれぞれのメンバーが独自の方向から「日本型の母子関係」というテーマを捉えていることがわかり興味深かった。今後はそれぞれの考えが発展し集約されていくことになるが、ここでは昨年末の段階で示された各自の基礎的なオリエンテーションと、その後に出された基礎資料を紹介する。

楠見孝先生の研究は多岐にわたるが、一例として懐かしさや愛などの言葉が様々な概念とどのように関連しているという研究等を行ってきた。特に懐かしさという体験については、小さい頃密接に接したものに、その後の空白期間を経て再び接することで体験されるという説(空白期間説)を提唱する。楠見先生はその観点から母子関係を考えているが、基礎資料としては山口勸(2003) 甘え(山口勸 (編) 社会心理学: アジアからのアプローチ. 東京大学出版会)等を挙げる。

明和政子先生は、ヒトの脳と心の発達とその生物学的基盤を、比較発達科学のアプローチから明らかにしようとしている。従来西洋の中流階級の観察に基づくボウルビー等の愛着理論に代わり、新たな視点から日本特有の愛着機能を見直すことは出来ないかについて、特に生物学的な視点から模索する。キーワードとしては愛着、身体接触、embodimentなどをあげ、また基礎資料としては日本の霊長類学の草分け期の栗田を伝える意味で、今西錦司の「人間性の進化」(今西錦

司(編)「人間」毎日新聞社、1952)などを取り上げる予定である。

高橋靖恵先生は家族心理や家族力動のアセスメント、とりわけ精神分析の対象関係論を専門とする。その立場から先生は分析家Wilfred Bionの理論や、昨年度の本研究科の客員教授Rudi Vermote 氏との意見交換を通し、同氏も関心を示した西田哲学の視座から母子関係を捉えなおすことを考えている。なお研究のための基礎資料としては、国際的に名高いわが国の精神分析家北山修の「見るなの禁止」(1993年、岩崎学術出版社)等を挙げる。

梅村高太郎先生はこれまで思春期のクライアントへの心理療法を専門とする傍ら、家屋画や室内画などの投影描画法を用いる研究に携わってきた。その中で、心身症を患う人々がもつ境界の緩さ、自他の区別の薄さが描画に現れることを見出してきたが、それが日本の家族の在り方とどのような関連を持つかについて考える。梅村先生は、西洋との対照から日本的な家族関係のありようを描き出している河合隼雄の著作(河合隼雄(1980)『家族関係を考える』第2章「個人・家・社会」)等を基礎資料として提示する。

最後に岡野は甘えの概念をベースにして考える。日本においては依存は必ずしもネガティブなものではなく、健全な相互依存は個の独立と同様重要と考える。そしてそれは如実に日本的な母子関係の在り方に及んでいると考える。基礎資料としては土居健郎の「甘えの構造」(1973年、弘文堂)を挙げる。

上述の通り、今のところグループのメンバー達の方向性にはまだ隔たりがあるが、今後は各メンバーが他のメンバーの研究を引用しつつ研究を進め、最終的には海外に発信可能な理論を構築していく予定である。

.....

以上は各メンバーの承認を得た報告であるが、統括チームよりもう一步踏み込んだ議論を求められたので、以下は私(岡野)独自の空想部分とお考えいただきたい。ステレオタイプ的な見方によれば、日本文化においては母子関係のレベルですでに甘えや依存が強調される一方で、西欧社会では個の自立が強調されるという印象がある。しかしおそらく文

化を超えて必要とされるのは両者が程よく調和した、いわば「成熟した依存mature dependence」であろう。本研究ではともすると依存に傾きがちな日本の母子関係の光と影についての私たちの思索や研究の歩みを海外に伝えることで、個人間、文化間、ないしは国家間の健康的な依存や相互承認のあるべき姿を問う一助になることを期待する。

事務室から

教務掛で思うこと

掛長 宇野 純子

教育学研究科事務室で仕事を始めてから、半年が過ぎようとしています。こちらの学生さんは、教育学部祭や新入生歓迎会など活発に活動される場面が多く見受けられ、微笑ましいです。

大学生になると一気に世界が広がり、きっと毎日楽しいだろうと想像します。

自分自身が学生だった頃は、携帯電話やSNSなんてなかったのに、どうやって友達と待ち合わせしていたのか？

遅刻する(される)こともあったはずだし、待ち合わせ場所を間違えることもあったと思うのに。でも、記憶では、ちゃんと友達と待ち合わせ場所で出て出かけていました。

友達作りも、現在と昔では違うようです。

現在は、入学前から同じ大学・学部に入学者同士が、SNSで交流を始めるようです。

私の頃は、入学式や語学のクラスで出会って、隣近所にいた話しかけやすい人に声をかけるという狭い人間関係で生きていたなあと思います。

時間もたっぷりあると思いますので、外国に行ったり、視野を広めてほしいと思います。

この半年間で、一番印象に残っていることは、学部入試です。

受験生の皆さんが一所懸命受験勉強をされている間、大学も入学試験の準備を着々と行っています。

実施要領や募集要項の作成、帳票のチェック、試験室設営などの準備を進め、入試当日を迎えます。

受験生の真剣な表情に、こちらの緊張も高まりました。

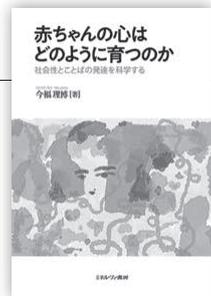
無事合格を果たし、晴れやかに入学式を迎え、そして、卒業されていくのですが、そういった学生さんたちの姿を見られることにやりがいを実感します。

今年は通常業務に加えて、教育学部70周年記念行事が開催されます。また、Kyoto-iUP履修生の受入れ体制やCAP制導入について検討しなければなりません。

ますます月日が早く流れていきそうですが、丁寧に仕事をして、教育学研究科の発展に尽力していきたいと思っています。

若手研究者出版助成事業

教育学研究科では、京都大学総長裁量経費を得て、優秀な若手研究者による博士論文の出版助成事業を行っております。本制度を利用して昨年度は7件採択されましたので、ご紹介します。



赤ちゃんの心はどのように育つのか：社会性とことばの発達を科学する

ミネルヴァ書房

今福 理博 京都大学大学院教育学研究科博士後期課程平成29年5月修了 / 武蔵野大学教育学部 講師

最新の発達心理学・発達科学研究が解き明かす、社会性とことばの発達のしくみとは。赤ちゃんや子どもの発達を理解する上で、その知見が科学的根拠(エビデンス)に基づいていることは重要です。

本書は、「どのような環境が社会性やことばの発達に重要なのか?」「ことばを聞く・話す力はどのように発達するのか?」「発達障害(神経発達症)の心の育ちとは?」「これからの子育てで大切なことは?」など、現代社会で注目される様々なテーマを含め、心の育ちをめぐる最前線を科学的にわかりやすく紹介しています。子育てや教育に携わる方や研究者をはじめ多くの方に手に取っていただき、現代の子どもの発達と環境のダイナミックな関係性の科学的な理解の一助になれば幸いです。



若者支援の日英比較—社会関係資本の観点から

晃洋書房、2019年3月10日

井上 慧真 京都大学大学院教育学研究科博士後期課程平成30年3月修了 / 帝京大学文学部社会学科助教

学校への入学、卒業、就職、結婚などの様々な出来事は、大人になるまでの道のり—「成人期への移行」を形づくる経験です。社会の急速な変化により、大人になるまでの道のりのどこかで躓いたとき、悩みを共有できる人を見つけにくくなっています。このような状況のなかで、若者支援とよばれる活動に多くの人が関わってきました。多くは民間の有志による活動から出発していますが、政府や自治体が関わることも増えています。

拙著は、このような活動に光を当て、それがいかに形成されてきたのかを検討したものです。支援を支える「人」のつながりのあり方、そして公的な事業として位置づけられる中でそれがどのように変化してきたのかを、社会関係資本論に依りながら考察しました。若者支援の「過程」をどのような枠組みで捉え、分析するのかを模索する試みとして、お役に立てましたら幸いです。



保育実践へのエコロジカル・アプローチ—アフォードンス理論で世界と出会う

九州大学出版会

山本 一成 京都大学大学院教育学研究科博士後期課程平成29年9月修了 / 滋賀大学教育学部 講師

保育とは、ただ子どもを預かるだけの営みではありません。保育者は、子どもを取り巻く環境を構成することを通して、子どもたちの遊びと学びが豊かに展開されていくよう、様々な工夫を行っています。本書では、筆者自身が保育者として経験した事例を、エドワード・リードの生態学的経験科学の立場から記述・考察することで、新たな保育環境論を提示しました。

本書の軸となっているのが、「出会われていない環境」の概念です。それまで環境に潜在していた意味や価値を、保育者が子どもとともに発見するとき、「ねらい」に捉われすぎることのない豊かな保育の可能性が開かれていきます。「ありふれたもの」が未だ出会わざる側面を残しつつ「そこにある」ということ。そのことを気に留める姿勢が、ひとつの保育実践へのアプローチになると考えています。



木村素衛「表現愛」の人間学—「表現」「形成」「作ること」の身体論

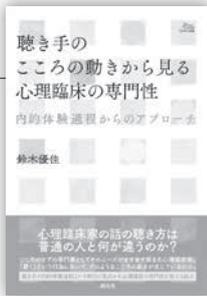
ミネルヴァ書房

門前 斐紀 京都大学大学院教育学研究科博士後期課程平成29年9月修了 / 立命館大学・大阪教育大学 非常勤講師

本書は、京都学派の思想家・木村素衛(もとむり)(1895-1946)の教育哲学を身体論に沿って読み解き、「表現愛」の人間学として描出する試みである。思想を代表する「表現愛」という概念は、個人が抱く愛情や愛着ではなく、「身体的存在」としての自己と他者が影響を及ぼし合い生成変容する世界構造化の原理を指す。

木村は、戦前の国民教育論と向き合いつつ、異質な他者同士が「表現」「形成」を交わし文化の「世界史的交流圏」をともに作り出すことを問い深めた。戦後はアメリカ教育使節団に応じる日本側の委員会に選出されたが、その直後に急逝したため、木村教育学は戦後教育学と直接的な関わりを持たない。そこで本書は一連の思索を感性的思考の教育哲学として読み返し、「文化」と「教育」のつながりを軸に、今日の表現教育やコミュニケーション教育の理論的側面について考察した。

若手研究者出版助成事業



聴き手のこころの動きから見る心理臨床の専門性—内的体験過程からのアプローチ— 創元社

鈴木 優佳 京都大学大学院教育学研究科博士後期課程 平成30年3月修了 / 京都大学大学院教育学研究科臨床心理学講座 特定助教

心理臨床家の話の聴き方は普通の人と何が違うのだろうか。心理臨床の実践のなかで何が生じているのだろうか。心理臨床の根幹にある専門性とはどのようなものだろうか。心の問題が多様化する現代において、これらの問いについて改めて問い直す必要が生じてきています。

本書はこれらの問いに対して、悩みの聴き手側である心理臨床家の内的体験過程を手がかりにして、実践の内側から専門性を捉えていこうとしたものです。ここでは、専門家と非専門家の聴き方の違いに焦点を当てた調査研究や、聴き手側の視点に着目した文献研究、聴き手側のこころの動きをも検討した事例研究などを通して、専門性の在りようを多角的に論じています。心理臨床の専門性研究に興味がある方はもちろん、普段から身近な人の悩みをどう聴いたらよいかと悩む方々にも参考になるところがあれば幸いです。

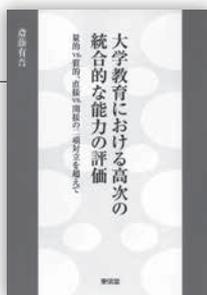


現代ベトナム高等教育の構造：国家の管理と党の領導 東信堂

関口 洋平 京都大学大学院教育学研究科博士後期課程 平成30年3月修了 / 広島大学教育開発国際協力研究センター 研究員

1986年にドイモイ政策を打ち出して以降、ベトナムでは計画経済体制から市場経済体制への移行(体制移行)過程で従来の国家や共産党による厳しい大学への統制が見直されてきた。その過程では、企業的な管理運営体制をとる私塾大学の設置や公立大学の運営における自律性の拡大など、大胆な高等教育改革がおこなわれてきている。高等教育の市場化や自由化をめざす改革が、共産党による一党支配が現在も維持されているベトナムで生じているのはなぜなのか。

本書は、ロシアや中国という体制間の類似性の高い国ぐにを視野に入れながら、体制移行に伴って生じるベトナム高等教育の管理運営改革と国家と共産党による大学への管理・統制の実態を考察し、多様化した高等教育の構造のなかで国家や党がいかなる論理から大学へ関与しているのかを明らかにするものである。



大学教育における高次の統合的な能力の評価—量的 vs. 質的、直接 vs. 間接の二項対立を超えて— 東信堂

斎藤 有吾 京都大学大学院教育学研究科博士後期課程 平成30年3月修了 / 新潟大学経営戦略本部教育戦略統括室 准教授

大学教員はありがたいことに、折にふれて学生の学びと成長を実感することができる立場にいます。そしてあまりありがたいことかもしれませんが、そのような学生の学びと成長を、何かしらの評価手法で捉えた上で、教育改善などをすすめているという証拠を示さなくてはならない時代になってきました。

しかし、大学で獲得することが期待される資質・能力を妥当に評価することは容易ではありません。「複雑な状況の中で特定の問題の解決を図る能力」を評価する方法なんてパツと思いつきませんよね。本書は、そのような大学教育における評価に向き合ったものです。

大学教員を将来のキャリアに考えている教育学部生がいらっしやいましたら、P地下に一冊こっそり置いてきましたので、特にやることのないときに手にとってご覧ください。

主な出来事(H30.11.1~H31.3.31)

11月

- 11日(日) グローバル教育展開オフィス
レクチャーシリーズ第4回
「Making Tea, Making Japan—茶道と日本文化を考える—
(講師:ロンドン大学東洋アフリカ研究学院 クリステン・スーラック准教授)
国際科学イノベーション棟
- 11日(日) 附属臨床教育実践研究センター
公開講座「不可知なもの」—ことばによる思考を超える心の機能と心の変化—
(講演者:京都大学大学院教育学研究科客員教授/ルーベン大学精神医学センター ルディー・ベルモート部門長)
京都テルサ
- 13日(火)~15日(木) **Smart City Expo World Congress 2018 (SCEWC2018) における Japan's Hot Startups Pitch ライブストリーム**
教育学部本館
- 16日(金) **小中高大連携:滋賀県立膳所高等学校 特別授業「図書館の歴史と多様性」**
(講師:福井 佑介講師)
文学部第二講義室
- 30日(金) **小中高大連携:滋賀県立膳所高等学校 特別授業「リスク認知の心理学」**
(講師:楠見 孝教授)
教育学部本館

12月

- 1日(土) グローバル教育展開オフィス
開設記念シンポジウム『グローバル時代における「日本型」教育文化のあらたな可能性』
(講演者:オックスフォード大学 ロジャー・グッドマン教授、ジョージア大学 ジョセフ・トービン教授、
ニューイングランド大学 高山 敬太准教授)
国際科学イノベーション棟
- 6日(木) **小中高大連携:奈良県橿原市立白檀中学校 特別授業「命の授業~「ちがい」っておもしろい~」**
(講師:安藤 幸講師)
奈良県橿原市立白檀中学校
- 15日(土) 臨床教育実践研究センター
E.FORUM講演会「進路多様校における、社会に開かれた教育を通じたカリキュラム開発」
(講演者:東京都立多摩高等学校 望月 未希教諭)
総合研究2号館
- 16日(日) こころの支援室
「京大探索クリスマス編&和・話・輪の会」
総合研究1号館
- 22日(土) **「環境・防災地域実践活動高校生サミット 高大連携フォーラムin京都大学」**
人間・環境学研究科大講義室

1月

- 13日(日) **ミニ・シンポジウム「メディア専門職の理想と実像—ジャーナリスト教育の日英比較から」**
(講演者:佐藤 卓己教授、同志社大学大学院 河崎 吉紀教授、東海大学 飯塚 浩一教授、
大阪芸術大学短期大学部 松尾 理也教授)
教育学部本館

3月

- 23日(土) 臨床教育実践研究センター
E.FORUM 第14回実践交流会
吉田南総合館東棟

諸記録

平成31年度入試結果

◎教育学部

日程等		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
前期日程	文系	44	169	153	44	55
	理系	10	37	35	11	
特色入試		6	30	30	6	6
学士入学(第3年次編入学)		10	20	18	5	5

※前期日程の募集人員は、特色入試において最終的な入学手続者数が募集人員に満たない場合には、残余の募集人員を加えます。()内の数は外国人留学生で内数

◎教育学研究科

課程等		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数	
教育学 環境専攻	修士 課程	研究者養成プログラム	37	68(13)	66(13)	33(4)	32(4)
		教育実践指導者養成プログラム	5	7	7	2	2
	博士 後期 課程	研究者養成プログラム	若干名	17(1)	16	4	4
		臨床実践指導者養成プログラム	4	1	1	1	1

※博士後期課程(研究者養成プログラム)は内部進学者を除いた数。()内の数は外国人留学生で内数

平成30年度学位授与件数

学位名等		授与者数
学士	教育科学科	69
	教育科学専攻	22
修士	臨床教育学専攻	9
	課程博士	12
博士	論文博士	2

平成30年度教育職員免許状取得状況

中学校教諭専修免許状	0
中学校教諭1種免許状	3
高等学校教諭専修免許状	2
高等学校教諭1種免許状	5
特別支援学校教諭1種免許状	1

外部資金受入れ(H31年度)

◎共同研究

研究題目	委託者	担当者
筆圧とストレスに関する研究	株式会社ワコム	野村 理朗

◎受託研究

研究題目	委託者	担当者
二国間交流事業 イスラエルとの共同研究(ISF)「親子の相互作用における神経生理学的同期性」	独立行政法人 日本学術振興会	明和 政子
二国間交流事業 フランスとの共同研究(CNRS)「人間変容の政治教育:哲学と教育の学際・国際研究」	独立行政法人 日本学術振興会	齋藤 直子
革新的イノベーション創出プログラム(COI STREAM)「活力ある生涯のためのLast 5Xイノベーション」拠点 女性と子どものこころからの健康サポート:育児サポート	国立研究開発法人 科学技術振興機構	明和 政子
「教育現場や多様な学習の場等と認知科学、心理学等の研究開発を融合させた実践に基づく新たな学習モデルの構築と社会への展開」	国立大学法人 岡山大学	久富 望

◎寄付金

研究題目	寄附者	担当者
京都大学シリーズ「教職教養講座 全15巻」出版研究	協同出版株式会社	矢野 智司 西平 直 西岡 加名恵 他
情報分野における専修学校と専門職大学院大学の教育史に関する調査・研究	京都情報大学院大学	田中 智子
双方向のデジタルメディアと受動的メディアが子どもの非認知能力の発達に与える影響	公益財団法人 電気通信普及財団	森口 佑介
天気予報のメディア史	公益財団法人 放送文化基金	水出 幸輝

科学研究費補助金(平成31年度)

事業名	研究課題名	氏名
基盤研究(A)	身体的表象から自他分離表象にいたる発達プロセスの解明	明和 政子
基盤研究(B)	なつかしさ感情の機能と個人差:認知・神経基盤の解明と応用	楠見 孝
基盤研究(B)	戦後日本における政治家・財界人の教育観に関する教育社会学的研究	稲垣 恭子
基盤研究(B)	後発国における大学院教育及び学位制度の導入と変容に関する比較研究	南部 広孝
基盤研究(B)	パフォーマンス評価を活かしたカリキュラム・マネジメントの改善方略の開発	西岡 加名恵
基盤研究(B)	ゼロ年代以後の教育歴とライフコースの変化に関するパネル調査研究	岩井 八郎
基盤研究(B)	養育行動が幼児の実行機能を媒介して社会的行動に寄与する過程の発達認知神経科学研究	森口 佑介
基盤研究(B)	戦後東アジア諸地域における教育の比較史的分析ー冷戦と植民地主義に着目してー	駒込 武
基盤研究(B)	21世紀型コンピテンシー育成のためのカリキュラムと評価の開発	矢野 智司
基盤研究(B)	批判的犯罪学の観点をふまえた非行からの離脱過程に関する研究	岡邊 健
基盤研究(B)	「資質・能力」育成を促進する教員研修プログラムの開発	矢野 智司
基盤研究(B)	「畏敬」の心理・生物学的基盤とその効用に関する構成論的研究	野村 理朗
基盤研究(C)	音韻的作動記憶における系列情報保持を支える時間構造の長期知識	齊藤 智
基盤研究(C)	ケアとスピリチュアリティの教育人間学的解明-女性宗教者への聞き取り調査を中心に	西平 直
基盤研究(C)	心理アセスメントにおけるスーパーヴィジョンシステムの構築	高橋 靖恵
基盤研究(C)	<哲学の女性性>とアメリカ哲学のグローバルな再生:政治教育の実践哲学研究	齋藤 直子
基盤研究(C)	教師力(タクト)熟達の日独比較ー学校日常の緊急性・不確実性対処に関する実証研究	鈴木 晶子
基盤研究(C)	森有礼文部大臣時代の教育政策に関する総合的研究ー「森文政」期像の再構築ー	田中 智子
基盤C特設	紛争の発生とその緩和に関わる人間本性の理解ー心理・神経・遺伝学的研究ー	野村 理朗
基盤研究(C)	国際博覧会条約(1928年)及び博覧会国際事務局(1931年)の成立に関する研究	佐野 真由子
基盤研究(C)	大正・昭和初期都市新中間層における理想的人間像の形成と変容	竹内 里欧
基盤研究(C)	教育成果の質的測定を活用した教員・学校・教委連携型教育改善システムの開発的研究	服部 憲児
基盤研究(C)	非英語圏トランスナショナル高等教育の展開に関する国際比較研究	杉本 均
基盤研究(C)	資質・能力を育成する授業づくりを軸にした学校改善の方法論に関する開発研究	石井 英真
基盤研究(C)	共感性の発達基盤に関する縦断データを用いた行動遺伝学的研究	高橋 雄介
若手研究(B)	宗教を取り入れた道徳教育による人間形成の理論と実践に関する研究	広瀬 悠三
若手研究(B)	近世教育メディア史における「無料」の価値ー「施印」に着目して	ファンステーンパル ニールス
若手研究(B)	Is An Alternative Concept of Learning Driving East Asian Academic Achievement? Comparisons of PISA Performance with Implications for Policy Reforms	Rappleye Jeremy
若手研究	Round Studyの有効性の検証と評価シートの開発・効果検討	黒田 真由美
若手研究	図書館の社会的責任に関する戦後史研究	福井 佑介
研究活動スタート支援	海外に長期滞在する日本人家庭の心理社会的適応	安藤 幸
研究活動スタート支援	視覚ー触覚間統合にかかわる神経応答の敏感期とそのメカニズムの解明	田中 友香理
国際共同研究強化(B)	他なるものとの共存に向けた政治教育:日本先導によるアメリカ実践哲学の国際対話研究	齋藤 直子
国際共同研究強化(B)	認知リソース概念の誤謬に挑む国際共同研究	齊藤 智

厚生労働科学研究費補助金(分担金)

研究課題名	氏名
HIV陽性者に対する精神・心理的支援方策および連携体制構築に資する研究	大山 泰宏

諸記録

教員寄贈図書

寄贈者氏名	寄贈図書名	出版社	出版年
石井 英真	アクティブ・ラーニングを超えていく「研究する」教師へ： 教師が学び合う「実践研究」の方法：教師の資質・能力を高める!	日本標準	2017
石井 英真	中教審「答申」を読み解く： 新学習指導要領を使いこなし、質の高い授業を創造するために	日本標準	2017
石井 英真	小学校発アクティブ・ラーニングを超える授業： 質の高い学びのヴィジョン「教科する」授業	日本標準	2017
石井 英真	授業改善8つのアクション：学び合えるチームが最高の授業をつくる!	東洋館出版社	2018
稲垣 恭子	変容する社会と教育のゆくえ(教育社会学のフロンティア；2)	岩波書店	2018
岡野 憲一郎	快の錬金術：報酬系から見た心(脳と心のライブラリー)	岩崎学術出版社	2017
岡野 憲一郎	精神科医が教える忘れる技術	創元社	2019
岡野 憲一郎	精神分析新時代：トラウマ・解離・脳と「新無意識」から問い直す	岩崎学術出版社	2018
教育認知心理学講座	教育学研究科開設科目授業成果報告書： 京都大学デザイン学大学院連携プログラム 平成29年度	楠見孝	2018
楠見 孝	心理学って何だろうか？： 四千人の調査から見える期待と現実(心理学叢書)	誠信書房	2018
楠見 孝	心理学検定公式問題集 2017版	実務教育出版	2017
楠見 孝	認定心理士資格準拠実験・実習で学ぶ心理学の基礎	金子書房	2015
齋藤 直子	「翻訳」のさなかにある社会正義	東京大学出版会	2018
佐藤 卓己	ファシスト的公共性：総力戦体制のメディア学	岩波書店	2018
佐藤 卓己	現代メディア史(岩波テキストブックス)；新版	岩波書店	2018
佐藤 卓己	近代日本のメディア議員：「政治のメディア化」の歴史社会学	創元社	2018
佐藤 卓己	テレビの教養：一億総博知化への系譜(岩波現代文庫；学術；399)	岩波書店	2019
佐藤 卓己	大衆宣伝の神話： マルクスからヒトラーへのメディア史(ちくま学芸文庫；[サ31-1])；増補	筑摩書房	2014
佐藤 卓己	ヒトラーの呪縛：日本ナチカル研究序説(中公文庫)上,下(全2冊)	中央公論新社	2015
佐野 真由子	幕末外交儀礼の研究：欧米外交官たちの将軍拝謁	思文閣出版	2016
佐野 真由子	万国博覧会と人間の歴史	思文閣出版	2015
佐野 真由子	クララ・ホイットニーが綴った明治の日々(日記で読む日本史；18)	臨川書店	2019
鈴木 優佳	瞞き手のこころの動きから見る心理臨床の専門性： 内的体験過程からのアプローチ(アカデミア叢書)	創元社	2019
高橋 靖恵	いのちを巡る臨床： 生と死のあわいに生きる臨床の叢智(京大心理臨床シリーズ；12)	創元社	2018
高橋 靖恵	ロールシャッハ法解説：名古屋大学式技法	金子書房	2018
高橋 靖恵	家族心理学ハンドブック	金子書房	2019
田中 智子	明治史講義 人物篇(ちくま新書)	筑摩書房	2018
田中 智子	近代天皇制と社会(京都大学人文科学研究所研究報告)	思文閣出版	2018
田中 康裕	魂の論理的生命：心理学の厳密な概念に向けて	創元社	2018
千葉 友里香	箱庭療法と心の変容：イメージと関係性の視点から(アカデミア叢書)	創元社	2018
南部 広孝	後発国における大学院教育及び学位制度の導入と変容に関する比較研究 (中間報告書第1冊)	南部広孝	2018
西岡 加名恵, 石井 英真	Q&Aでよくわかる!「見方・考え方」を育てるパフォーマンス評価	明治図書出版	2018
服部 憲児	学校改善に向けた「往還型」質的測定手法の開発的研究	服部憲児	2018
溝上 慎一	大学生白書	東信堂	2018
矢野 智司	教職教育論(教職教養講座；第1巻)	協同出版	2017
矢野 智司	臨床教育学(教職教養講座；第3巻)	協同出版	2017

受入期間：2018/4/1～2019/3/31 寄贈者氏名順(敬称略)

教育学研究科・教育学部図書室にいただいた寄贈者の著作・分担執筆・翻訳のみの掲載です。今後とも蔵書充実のためにご寄贈くださいますようお願いいたします。

人事異動(H30.11.1~R1.5.1)

平成30年11月30日	教務補佐員(教育認知心理学)	退職
平成30年12月1日	事務補佐員(教育認知心理学)	採用
平成30年12月31日	派遣職員(総務掛)	任期満了
平成31年1月1日	派遣職員(総務掛)	採用
平成31年1月9日	派遣職員(教育・人間科学)	採用
平成31年2月1日	西 見奈子 准教授(臨床心理学) 派遣職員(総務掛)	採用 採用
平成31年2月8日	派遣職員(総務掛)	退職
平成31年3月1日	教務補佐員(地域連携教育研究推進ユニット)	採用

平成31年3月31日	花田 史彦 助教(教育社会学)	退職
	郭 暁博 助教(教育研究関連)	退職
	鍛冶 美幸 研究員(臨床心理学)	退職
	長谷 綾子 研究員(臨床心理学)	退職
	金子 迪大 研究員(教育認知心理学)	退職
	全 京和 教務補佐員(地域連携教育研究推進ユニット)	退職
	研究員(地域連携教育研究推進ユニット)	退職
	教務補佐員(臨床教育実践研究センター)	退職
	技術補佐員(教育・人間科学)	退職
	事務補佐員(地域連携教育研究推進ユニット)	退職
	派遣職員(総務掛)	任期満了
	派遣職員(教育・人間科学)	任期満了
	派遣職員(教育実践コラボレーション・センター)	任期満了
平成31年4月1日	高山 敬太 教授(グローバル教育展開オフィス)	採用
	藤野 正寛 助教(教育研究関連)	採用
	山崎 基嗣 特定助教(臨床教育実践研究センター)	採用
	吉田 弘子 掛長(図書掛)附属図書館学術支援課長補佐へ配置換	
	美濃部 朋子 掛長(図書掛)経済研究所(図書掛)より	配置換
	堀 友彌 研究員(教育認知心理学)	採用
	廖 于晴 研究員(地域連携教育研究推進ユニット)	採用
	次橋 秀樹 研究員(教育・人間科学)	採用
	島田 健太郎 研究員(地域連携教育研究推進ユニット)	採用
	技術補佐員(教育・人間科学)	採用
	事務補佐員(教育・人間科学)	採用
	事務補佐員(教育・人間科学)	採用
	事務補佐員(教育実践コラボレーション・センター)	採用
	事務補佐員(地域連携教育研究推進ユニット)	採用
	事務補佐員(教育・人間科学)	採用
	派遣職員(総務掛)	採用

教育学研究科・教育学部基金

ご寄付いただきました方々への感謝の意を込め、ここにご芳名を掲載させていただきます。(公開をご希望されない方については、掲載しておりません。)

池田 実	松本 嘉一
下野 正代	池本 一郎
野口 琴音	小林 哲郎
福田 知洋	柴原 弘志
大塚 雄作	村山 正治
伊藤 大介	米山 弘
手嶋 康	安齋 久浩
金山 靖道	渡部 修三
鴨井 慶雄	橋爪 茂
岩井 有香	長沼 弘三郎
上中 良子	

(五十音順) 令和元年5月31日現在

—未来の教育を創造するため、人間・社会についての世界最先端の研究を展開し、成果の社会還元を行うとともに、学生の教育環境の整備に取り組みます—

本研究科・学部は、1949年の創設以来、世界最先端の教育学研究とその研究者の養成、ならびに全学の教職教育の責任部局という責務を担いながら、これまで各界で活躍する有為な人材を輩出し、優れた研究成果を現場に還元することで社会の要請に応えてきました。

本研究科・学部は、学校教育はもとより、地域、家庭、職場などが育っていくあらゆる場を「人間形成」の場として探究しています。その中で、不登校・学習意欲不振生徒のための学校改善、過疎地域の地域振興などへの提言、教育委員会の指導主事など第一線の実践現場で働く人びとにとっての研修の機会を提供しておりますが、このような活動は、大学院生が現場のリアルな問題に触れながら自らの研究関心と手法を研ぎすますための教育の場でもあります。

近年、社会と連携したこうした教育研究活動の必要性が増す状況において、本研究科・学部が社会と連携しながら実践的な教育・研究を行うためには、安定した財政基盤が必要です。その礎の一つとして、2015年に「教育学研究科・教育学部基金」を設立しました。本基金では、研究の成果

を現場(フィールド)に返し、また現場での課題を教育・研究に生かしていく、「理論と実践の往還型」の教育・研究という本研究科・学部の特色ある活動を維持するため、以下の活動に活用します。

皆さまのご協力をよろしくお願いいたします。

基金の使途:

項目	具体例
(1) 教育支援	・学生のための図書・教材等の購入 ・学生関係居室の整備・維持管理 ・障害学生等のための学習補助者の雇用 ・学生・院生の海外派遣 など
(2) 研究支援	・研究活動基盤整備の支援 ・研究・学術資料の整備 ・公開講座・講演会等の開催 など
(3) その他事業支援	・京都大学教育学研究科シリーズ本の出版補助 ・修了生・卒業生との連携活動 など

詳細については以下をご覧ください。
<http://www.kikin.kyoto-u.ac.jp/contribution/education/index.html>

新任教員・事務職員紹介



高山 敬太
教授

アメリカで5年過ごした後、11年勤務したオーストラリアの大学を離れて京都に参りました。京都大学には奇人・変人が多いという噂を聞いておりました、ならば私でも大丈夫かと思った次第です。よろしくお願い申し上げます。

所属 グローバル教育展開オフィス
専門 教育社会学、比較・国際教育学



西 見奈子
准教授

精神分析の臨床と研究をおこなってきました。知との出会いを楽しみにしております。どうぞよろしくお願いいたします。

所属 臨床心理学講座
専門 精神分析 精神分析史
心理臨床におけるスーパービジョン



藤野 正寛
助教

4月に着任しました。認知心理学の手法やfMRIを用いて瞑想のメカニズムの研究を進めています。どうぞよろしくお願いいたします。

所属 教育研究関連
専門 認知心理学



山崎 基嗣
特定助教

4月に着任いたしました。これまで学んできたことをもとに、教育、研究、実践に精一杯取り組んでいきたいと思っております。

所属 附属臨床教育実践研究センター
専門 心理臨床学

美濃部 朋子 掛長

他の図書館室にはない絵本のコレクションなどがあり、毎日書庫に行くのが楽しいです。これからどうぞよろしくお願いいたします。

所属掛 図書掛

訃報



苧阪 良二 京都大学名誉教授

苧阪良二先生は、平成30年8月12日逝去された。享年100歳。昭和18年9月東京帝国大学文学部心理学科卒、京都帝国大学大学院文学部助手、教育学部助教授を経て昭和42年教授。昭和50年名古屋大学環境医学研究所第六部門(航空心理)教授、昭和57年定年退官。

京都大学、名古屋大学名誉教授。平成3年勲三等旭日中綬章受章。

視空間構造の成立にかかわる実験心理学的研究、視聴覚教育において多くの業績を上げるとともに、大学や学会の要職を歴任し、教育の発展に大きく貢献された。

編集後記



「なぜみんな水道水を飲まないのか」、ある小学校の総合学習でそんな問いが追求されていた。個別にはさまざまな事情もあると思うが、安心して水道水が飲める国で、日々の飲料水を別に購入していること、この生活感覚の土台にある特権にこの子たちは、また周りの大人たちは気づいているのだろうか。「特権に気づかない特権階級」の問題が指摘されたりもしているが、そうした社会的な分断の進行を、近頃さまざまな場面で感じている。「『非体制』というダンディズム」、そういう「やせ我慢」を、私などはアカデミズムのカッコよさとして学んできたけれど、それが時代遅れのダサイ生き方としか映らない世の中になってほしくないと思う。

石井 英真

京都大学教育学研究科・教育学部広報委員会

- 委員長 佐野真由子 教授 (教育社会学講座)
- 委員 稲垣 恭子 教授 (教育学研究科長・教育学部長)
- 委員 松下 姫歌 准教授 (臨床教育実践教育センター)
- 委員 石井 英真 准教授 (教育・人間科学講座)
- 委員 小西 博之 事務長
- 委員 靱 尚子 総務掛長
- 委員 宇野 純子 教務掛長

事務担当

教育学研究科・教育学部総務掛

TEL 075(753)3000

ホームページ <http://www.educ.kyoto-u.ac.jp>